

## [22/23] 経済論究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/3077290>

---

出版情報：経済論究. 22/23, 1969-03-25. 九州大学大学院経済学会  
バージョン：  
権利関係：

## 『高橋さんのこと』

徳 永 正 二 郎

鹿児島大学に赴任なさって半年、突然のご逝去の報でした。

今にして知ることですが、週毎の個人的勉強会の最中、奥様のご入院、あるいは又ご不幸があったそうですね。六月にはわざわざ郵送で煙草を頂戴いただきましたが、病床生活をしておられたことなど一言もありませんでした。又僕のために大切にご蒐集なさった切抜きを郵便袋につめて、あるいはご邦友を介してご提供いただきました。いつも笑みをたたえられた静かな方でした。高橋さんの誠実なお人柄が只今のように焼きつき、私の心を痛めます。

これは御家族にたいする場合には、なおのこと輝いていたと伺いました。それが、いま、いたとしか表現しえません。それを意識するときなおのこと私の、否御家族はじめ多くの人々の心情を苦しめ揺り動かすことでしょう。とはいえ、他方で私は、人間の性格にとって大の長所の一つともいえる「誠実」の裏に欠陥ともいえるものも同居しているのではないかと、誠実味に欠けた己の性格を弁護したくさえるのです。

高橋さんを想うにつけ、あるいは又あなたの死を考えるにつけ、さらにまた御家族の皆様が明日に向かって力強く立ち向かおうと努められている姿をみる場合殊更に、私は私自身の「感傷」を私自身への厳しい「批判」として受けとめたくなるのです。「感傷」においてではなく、今迄通り静かな高橋さんとして、私への「批判者」として生きつづけて下さい。

私ばかりでなく、「小さな健ちゃん」、伸介君のうちに、あなたが誠実の上に力強く再生なさいますよう、願っています。

そして、伸介君をはじめとする皆様の新しいたくましい足音は、多くの人々の悲嘆の涙に明るい輝きを灯していることでしょう。

最後に、利発な御子息、高橋伸介君（三才）の只今の居所をお知らせして、高橋さんを追悼するつたない一文を閉じさせていただきます。

福岡県鞍手郡若宮町福丸錦町 安永佳伍様方

高 橋 京 子 様  
のぶ すけ 様  
伸 介 様

## 高橋健君を悼む

木 下 悦 二

高橋健君の突然の訃報に接して、大きな衝撃を受けるとともに、いささか悔恨の情の混るのを抑ええなかった。

少くとも形の上では、高橋君は私の最初の門下生である。九大経済学部卒業後、高橋君はある経済新聞社に入り、のちに大阪証券経済研究所の所員として活躍していた。もともと中小証券会社の共同調査機関の性格をもっていた同研究所が、証券業界の浮沈のなかで次第に自由な研究の雰囲気が出されてゆくと見越したのもあろうが、それよりも、研究者としての基礎を固めるために、再び九大にかえり大学院に入った。そして当時同研究所にいた岡崎守男氏の紹介で吉村正晴教授の指導を受けることになったのであった。昭和39年に産労研に専任となられた吉村教授から世界経済編講座を引き継いだ関係で、私が高橋君の指導教官となった次第である。

しかし、昭和38年に九大に来るまで、ずっと研究所育ちであった私には年齢を超えた同僚、友人は数多くあったけれども、弟子に類するものは一人として持ったこともなく、他人を指導するなどという経験を全く持ち合わさなかった。それだけに、私としてはただ戸惑うばかりで、全く放任の有様であった。今にして思えば、修士論文の作成にとり組んでいた高橋君が色々と困っていたらしいことに思いあたるのである。博士課程に進んでのちも、こうした状況はあまり変らなかつたのであって、結局指導教官らしいことを何一つしてあげられなかつたといえる。

大学院に進むまでの職歴とも関係あろうが、高橋君はなかなか筆が軽かった。ことに現実的な経済問題について論点を整理してゆく能力などは充分注目に値した。ただ、抽象論好みの現在の大学院の雰囲気の中で、高橋君は思弁的抽象的議論を苦手としていたのを、必要以上に弱点と考えていたように思われる。そのことが元来あまりにも自らにきびしい高橋君の性格からして、自らを責めさいなむ結果になつたのではなからうか。われわれのとり組んでいる経済学の学問領域では、現実をふまえない借りもの問題意識からはしばしど独

断論に導かれるし、現実的な問題意識に支えられない抽象論はともすればソフィスト的な展開に終って行き詰まることが多い。それだけに私はもっと現実分析の重要さを高橋君に説きつづけるべきだったかもしれない。

高橋君の最後の職場であった鹿児島大学法文学部は、先輩教官たちのゆきとどいた温かい心遣いにつつまれた、私などがみて、若い研究者にとってこれ以上のものを考えることのできない恵まれた環境を与えて下さっていた。それなのに、環境に甘まえ切れない高橋君の心のきびしさが眼を煩ってのちかえって焦躁感に駆り立てたのだろうか。大きな体にも似合わぬあの物静かで誠実な人柄の、一体何処に、あの猛々しい情熱がひそんでいたのだろうか。そのような情熱やきびしさは学問の途を選ぶ者になくてかなわぬものであろうが、われわれにはやはり学問的成果に結実するまでに抑えつづけて欲しかった。いまは遺稿となったラ・ミントの後進国経済論の検討をふまえて後進国問題にとり組んでゆくという方向をはっきり打ち出していただけに、私は次の成果を期待していたのである。

誠に繰り言めいた一文となったけれども、蕾のまま散った花に捧げる愛惜の気持を汲んでいただきたい。